



ナス農家

おかもと はるか
岡本 晴佳さん(24) 安田町唐浜

好きな言葉



2年間の新規就農者研修を終え、7月に独立した。「不安と緊張でいっぱい。でも大好きな安田町で農業ができる。私、幸せです」と瞳を輝かせる。

香川県坂出市出身、高知大学農学部1年時の夏、過疎や集落維持といった課題を学ぶため、安芸郡安田町の小川地区に滞在した。住良と話す中で感じたのは、人と人との近さ。「お互いのご先祖のごとまで知っているんです」と衝撃を受けた。

その冬、町内で行われた「なかやま山芋まつり」に参加。翌年には、町内の食の魅力発信しよと同級生4人で「安田の食応援隊」を結成し、アユの姿ずしや自然薯汁といった郷土料理を紹介する冊子を作った。その後も卒業まで、何度も町に赴き、生産者グループや農家とのつながりを深めていった。

町への愛着が募り、いつしか移住を

決意していた。しかし両親は、安田での就農に猛反対。「香川に帰ってよければいいじゃないか」と迫られたが、「安田以外で農業するなんて考えられない」。説得に2年を要したが、「安田愛」をいらずに貰った。



主に育てる品種はナス。「直感」で選んだそうだが、町産園芸野菜の主力とあって、安定した収入が見込めることも頭にあった。研修中は、ベテラン生産者の手島隆福さん(57)＝同町東島＝に教えを請うた。

尊敬してやまない師匠に口を酸っぱくして言われるのが「木をよく見ろ」ということ。めしべの先の柱頭が出過ぎていたら肥料が多すぎる。花の色が薄ければ温度が低い…。花や葉を注意深く見れば、何が足りないかが分かるそう。「今はまだ難しいですけど、それが分からなければ一人前にはなれません」。

疑問があれば、師匠にも臆すること

なくぶつけていく。「こわもてですけど、質問したら懇切丁寧に教えてくれて心強い。叱られたこともない。甘えすぎたらいけませんけど」。口ぶりはまるで父親を語る娘のようだ。

間もなく植え付けが始まり、来月末には実が採れ始める。収穫は来年6月末ま、続き、収量も徐々に増す。休日のない長1場は体力も消耗するが、手島さんは「生活がかかっちゃうゆえ、気も張るはず。乗り切れるよう、頑張る子やき」。その目を細めた。



ナス以外に手掛けるのが、12月に収穫する自然薯。出来栄は「掘ってみないと分からない。まるでほくち」だそう。ナスのことなら何でもござれの手島さんですら、小さかったり腐っていたり思うに任せない。なかなかくせ者が「町の特産品ですから。生産者が減っている今こそ踏ん張らない」と前向きだ。

大学入学時は「卒業したら、とっと

と香川に帰るつもりでした」と話すとそれが縁あって安田町に出合ふ、ついには就農。好きな言葉「人間万事塞翁が馬」そのものの人生だ。

学生時代からの知り合いには世話がっつもらっているそうで、かつて自身が応援した町が今、自身の応援団となっていて。目標は「子どもたちに『憧れの職業は農業』と言いつけてほしい」。安田の農業を引き継ぎたい。新米農家の挑戦は始まったばかりだ。

写真・反田浩昭
文・植村慎一郎
◆月曜日掲載

“安田愛”いちずに貫く



自然薯の棚の下で「早く師匠のよこになりたい」と話す岡本晴佳さん(安田町東島)